

---

# Memory world

左リュウ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Memory world

### 【Nコード】

N7000Y

### 【作者名】

左リユウ

### 【あらすじ】

Memory world。世界でトップと称されるゲーム会社、「クリエーション社」が開発した新作となる、VRMMOゲームである。このゲームのオープンベータテストに抽選で見事当選した鳴海翔太郎なるみしょうたろうは、ひよんな事から一緒に行く事となった学校のアイドルほしのゆい星野唯と共に、「クリエーション社」へと向かった。道中に出会った少年、照井嶺浩を仲間に加え、共にテストを行う翔太郎。倒したモンスターのメモリを『コレクション』し、その力を使い、ゲームを進める中、翔太郎達は、ログアウト不能という驚愕の事実を目の

当たりにする。こうして、本当のゲームが、幕を開けた。 ログア  
ウト不能のVRMMO物です。多分、主人公最強（予定）

## ロケイン

Memory world。

世界でトップと称されるゲーム会社、「クリエーション社」が開発した新作となる、VRMMOゲームである。

発売前から、その噂はネット上を飛び交い、発売前であるにも関わらず瞬く間に好評を博している。

そして、俺、鳴海翔太郎なるみしやうたろうも、そんな発売前の「Memory world」を楽しみにしている、ゲームユーザーの一人だ。

何しろ、実際に仮想空間へと行くことが出来るゲームなのだ。

今まで、実際にVRMMOゲームというのは現実には作られることは無かったのだが、しかし、ついに世界一と称されるゲーム会社が出来てくれた、というワケだ。

そしてなんと、俺はそんな世界初のVRMMOゲームのオープンベータテストに抽選で当選し、参加出来る事となったのだ。

こういう時に素晴らしいいくじ運を発揮できる俺を褒めてやりたい。

……いや、言い方を間違えた。

正確には、一人では、無い。

とは言ってもまあ、これが俺のご機嫌要因である内の一つ、なのだ。

現在、俺は（正確には俺達は）とある電車の中に居る。

これはクリエーション社が手配してくれた電車で、直でテスト会場まで向かうという電車だ。そして、この電車に乗っているのは全員、今回抽選で選ばれた、テストユーザー達、という事だ。

さて、そろそろ俺と一緒に居る人物を紹介しよう。

「ねえ、鳴海くん」

「ん？」

「まだかな？」

「もうすぐじゃないのかな」

現在、俺の隣には一人の可愛らしい女の子。

抽選で当たったテストユーザーには、一人の同伴が認められている。そして俺が連れてきたのが、この「星野唯<sup>ほしのゆい</sup>」だ。

この星野は、俺が通う高校でのいわゆるアイドル的存在だ。

成績優秀。

スポーツ万能。

才色兼備。

しかし、そんな星野には意外な趣味があった。

それが、ネットゲームである。

星野は別にアイドル的存在だから学校内で威張ったりはしない。むしろ、誰にでも優しい。

そして、ある日俺が友人に思わず「Memory world」のテストユーザーに選ばれた事を自慢していると、それが星野にも聞こえていたようで、そしてその日の放課後。

俺は星野に呼び出された。

最初は、告白かと思った（今思うとそれは勘違いで恥ずかしい。そもそも、星野となんて数えられる程しか接した事が無いというのに）。

しかし、星野が最初に言葉を発したのは、

「お願いします！ 私にも『Memory world』のオープンベータテストに参加させてください！」

だった。

こうして、星野の意外な趣味が俺には解ってしまったのだ。

ガツカリなんかしてないよ？ だって学校のアイドルと二人で電車に乗れちゃうんだから。

うん。別に悲しくなんか無い。涙なんて、出るわけないのだ。

そんなこんなで、Memory worldのオープンベータテスト当日を迎えた。

朝に駅前で集合すると、星野はなんとも可愛らしい格好で俺を待っていて、俺を見つけると笑顔をくれた。

その後、テンションが上がった俺は意気揚々と、星野と一緒に電車に乗り込んだのだった。

はい。回想終わり。

「おっ。仲が良いな。カップルか？」

回想を終えた俺と、ぼーっ、としていた星野に、席の近くから声がかけられた。

声の主を見てみると、俺達のすぐ側の席に、一人の少年が座っていた。

「悪かったな。カップルじゃ無くて」

本当に残念だ。

「ははっ。すまんすまん。アンタ達もやっぱ、テストユーザーに選ばれたんだよな？」

「ああ。で、お前は誰だ？」

「自己紹介が遅れたな。俺はてらみみねひろ照井嶺浩。アンタ達と同じ、テストユーザーだ」

「俺は鳴海翔太郎」

「私は星野唯です」

ぱっと見は結構気さくな奴だ。

それにしても、どうして俺達に声なんかかけてきたんだろう。

「どうして声をかけてきたのか、って言ったそうな顔をしてるな。まあ話してみると答えは簡単だ。テストユーザー同士、ゲーム内で協力出来る仲間が欲しいと思ってな」

ああ、成るほど。

ふむ。それは悪くない話だろう。

何しろまだまだ未知のゲームだ。仲間が居て、今の所は不利になる事もないだろうし、それに、ゲームは皆で楽しくやる方が面白いのだ。

これ、俺の持論な。

「俺はいいけど、星野はどうする？」

「勿論、OKです」

「決まりだな」

こうして、俺と星野は照井という新たな仲間を迎え、テスト会場までの道中を電車で揺られながら一緒に話をしたりしながら、楽しんだ。

テスト会場は、クリエイション社の本社で行われる。

実はテスト会場は本社だけでは無く、日本中のあらゆる所で行われ、そしてテストユーザーは招待者を含めて約4万人らしい（という事は抽選に当たったのは大体2万人ぐらいか？）。

そして、俺達の場合はたまたま本社でテストする、という事になったのだ。

テスト会場につくと、ザワザワと大人数の人がクリエイション社のビルの前に集まっていた。

しななくすると、案内人と思われる人がビルの中から出てきて、それぞれ何グループかに分けられて、テスト会場へと案内された。俺達は同じグループに入る事が出来た。

テスト会場は、白い部屋だった。

そして、真っ白な空間の中に、それと対比するような真っ黒な球体は何台か設置されていた。

案内人の人が、俺達に、とあるブレスレットを配布した。

説明を聞くと、どうやらこれが、ゲームの起動に必要ならしい。

そして、このブレスレットを聞き手に付け、そして球体の中で、ゲームが起動する。

ゲームの説明は全て、ゲーム内で行われるらしい。

「んじゃ、ゲームスタート地点に『中央広場』ってトコがあるらしいから、まずはそこに集合な」

「解った」

「解りました」

俺達はそれぞれユーザーネームを教えあい、ゲーム内で最初に集まるという町で集合するように決めた。

そして、俺は黒い球体の中に入った。

中には黒いシートのような物があり、俺はそこに座る。

座った途端、目の前に画面のような物が表示された。そこに、次々と白い文字が表示される。

ユーザーを確認しました。

Memory world · Starting

こうして、平凡な俺と、学校のアイドルと、道中に出会った気さくな少年と出会い、俺達のMemory worldが幕を開いたのだった。

## 1-1 ユーザー

ユーザーネームを設定してください。

ユーザーネーム：L e f t

ユーザー情報を習得中……………

ユーザー情報の習得に成功しました。

初期装備を選択してください。

剣・太刀・双剣・槍・杖・銃・弓・ハンマー

装備「太刀」が選択されました。

タイプ「剣士」が選択されました。

必要情報の登録を確認。

ユーザー名「Left」さん。

Memory Worldにログインします。

Now Loading

目を開けると、そこには見慣れない、西洋の広場のような物が広がっていた。

周囲には同じく、ログインしてきたであろうプレイヤー達が居る。

ここはどこだろうか。

きよろきよろと辺りを見回してみると、大きな看板に「中央広場」とある。

ここがスタート地点か。

俺はふと、ゲーム内での自分の姿が気になり始めた。何しろログイン画面ではほとんど名前と初期装備を決めるだけだったので、自分の用紙がどのようになっているのかは解らなかつた。とりあえず、自分の目に見える範囲では、なんだか現実世界の自分とさほど変わらない気がする。

「そつえば……このブレスレット……」

ウン、と、ブレスレットを意識した瞬間、目の前に白い画面が表示された。その画面には黒い文字で、このゲームの説明等が書かれてあり、そしてその他にもメニューも表示されていた。

とりあえず、ゲームの説明を見る前に「メニュー」の「装備」で自分の容姿を試みる事にした（因みにユーザーネームの「Left」は基本的に俺がオンラインゲームでいつも使う名前だ）

画面の中には凜々しく、そして、しっかりとした力強さを感じさせる少年が居た。

ていうか俺だった。ていうか脳内補正しすぎた。

真実を言えば、普通の少年であり、そして現実世界とほぼ同じ容姿をした姿の俺が居た。

「ゲームって、残酷だよな……」

せめてゲームの中だけでもイケメンになりたかつた。

因みに俺の現在の装備だが、ただの普通の服に、腰には太刀（ていうか日本刀）。

タイプが「剣士」である事から、文字通り「刀けんを使う戦士」みた

いだ。

おっと、そろそろ星野と嶺浩を探さないとな。

俺は、広場の中を、二人を探すために駆け出した。

## Now Loading

星野はすぐに見つかった。

やはり、星野は星野のままだった。格好は、文字通り普通の服だ。動きやすいようになっていいるのか、軽装だ。

そして手には「弓」のような物を持っていた。

因みに、星野のユーザーネームは「Yui」だった。

「鳴海くん？」

「ああ。俺だ。星野は……弓使いか何かか？」

「そうみたいです。タイプが『アーチェリー』でした。鳴海くんは、『剣士』という所でしょうか？」

「大当たり。で、嶺浩は？」

「まだ見つかってないんです。それはそうと、このゲームの説明、見てみましたか？」

「いや、まだ」

俺はブレスレットに意識を集中し、白いウィンドウを表示させる。そして、『ゲーム説明』という画面を、タッチする。

## Memory worldゲームルール説明

・戦闘方法は、手持ちの武器でモンスターを、自分の考える自由な動きで倒してください。

・戦闘終了後、倒したモンスターの情報メモリを、プレスレットに『コレクション』する事が出来ます。

・『コレクション』したモンスターメモリ（以下、M2）は、自分の能力として使用する事が出来ます。

・戦闘中に使用する事の出来るM2は、『メインメモリ』に入る5つです（ゲームを進めていくと、レベルアップ等の要因でメインメモリの容量が増える場合があります）。

・戦闘中に、『サブメモリ』の中のM2を『メインメモリ』に入れ替える事が出来ます。

・『サブメモリ』の容量はM2、10枠分です。

・『メインメモリ』、『サブメモリ』のどちらにも入れられなかったM2は、『バンクメモリ』に保存されます。一度戦闘に入ると、『バンクメモリ』からM2を引き出す事は出来ません。

・戦闘で使用されたM2は、経験値が溜まり、レベルアップしていきます。

「……つまり、倒したモンスターを『コレクション』して、そのM2をレベルアップしていく事がゲームのポイント、という事か」  
「『コレクション』するモンスターも重要ですよね」  
「それにしても、イマイチこのゲームの目的が解らないな」  
「それは……うーん。まだテスト段階の物だからなのではないのでしょうか？」

この際目的はともかくとして、問題は戦闘だ。

まだ戦闘を経験していないので、『コレクション』も、『M2の使用方法』もイマイチ解らないが、そこはまあ、戦闘を経験していけばなんとかなるだろう。

それよりも、俺も星野もまだレベルは当然の事ながら、1だ。  
とりあえず、まずはレベルアップの必要がある。

「あつ。そつだ鳴海くん。お互いの『ユーザーメモリ』を登録しておきませんか？」  
「そつだな」

どうやらこのゲーム内で、ユーザーメモリ、つまりユーザー情報を登録すると、登録したプレイヤー同士のステータスや装備など、その状態を詳しく確認したりする事が出来る。  
そして、登録ユーザー同士で連絡をとりあったりする事も出来るようだ。

まあ、出来る事はそれだけではないのだが、とりあえず今は登録を済ませておこう。

登録が終わり、俺と星野は今後の方針を練る為に、近場のカフェに入った。なんていうか、ゲームの中なのだが少しデート感覚になりそうだ。

「これからどうします?」

「そうだなあ。まずはとりあえず、レベルアップかな。所持金も満身に無い状態じゃどっちみち武器を買うことすら出来ない。それに俺達の能力とか、戦闘方法とか、M2の使い方とか、色々と確認しなきゃいけない事が山ほどある」

「やはりそうなりますよね。よし、それではさっそく外に出ましよう」

意気揚々と、星野は席を立った。

というか、嶺浩の事を忘れていている気がする。

「嶺浩くんの事なら、さっきの広場に「掲示板」という物があったので、そこにメッセージを残しておきましょう」

星野はすぐさまメッセージを残し、俺をずるずると引っ張るような形で、町の外へと出て行った。

Left:レベル1

メインメモリ:無し

サブメモリ:無し

Yui:レベル1

メインメモリ:無し

サブメモリ：無し

## 1 - 2 メモリ

しばらく外での戦闘を星野と共にこなし、なんとかM2を使った戦闘にも慣れてきた。

そしていくつか、M2も入手する事が出来た。

この戦闘を経験してみて解ったのだが、このM2があるのと無いのでは、かなり違う。例えば、最初の戦闘では、ただ単に俺は刀を振り回したり、星野は弓矢で攻撃、という事だけだったのだが、いくつかM2を入手してからは、戦闘方法にかなりバリエーションが出てきた。

例えば、「刀小僧」という、刀を持ったゆるきやら風のモンスター（恐らくまだ序盤だからだろう）を倒して入手したM2は、「刀使いLv1」というM2だった。

Lv1という事は恐らく、このメモリを使っていけば、ドンドン、レベルアップしていくのだろう。

そして、この「刀使い」というM2を使ってみると、刀の威力がいきなり向上した。つまり、刀を使った時の攻撃力が向上したのだ（試しに星野が使ってみたが、やはり『弓』の威力の向上は無かった）。

肝心の使い方はというと、『メモリブレスレット』の『メインメモリ』から、メモリを引き出す。メモリを引き出した際に、メモリはカード状に変化する。

そして、カード状に変化したメモリを「メモリブレスレット」に

スラッシュし、カードデータの読み取りが完了すれば、発動可能となる。

一見、めんどくさそうに見えるが、使用方法としては魔法を発動させるよりもシンプルで簡単だ。

メモリの引き出しは、頭で想像すればすぐにメインメモリが「空<sup>エ</sup>ア・ディスプレイ」に現れる。そこから選択すれば良いのだが、慣れれば頭の中で引き出したいM2をイメージするだけですぐにカード状となったM2が現れる。

ていうかあれだ。

この「カードをスラッシュする」という事がハマる。

大好き。

愛してる。

だってカッコイイじゃん!?

……だがしかし、発動までに隙が出来やすいという事は確かだ。

星野のような「弓」を使う遠距離タイプのプレイヤーなら、カードをスラッシュする暇はあるだろう。しかし、俺のような最前線バリバリと斬って斬って斬りまくるような近距離タイプのプレイヤーにはこの「カードをスラッシュする」というシステムは扱いづらい。

しかしその反面、レベルが上がればそれを補えるぐらいの可能性を秘めている事は確かであり、俺が思うにこのゲームは他プレイヤーとの連携が重要なのではないのだろうか。

一人では攻略が難しいゲーム。

ていうか、このカードスラッシュシステム（俺命名）があるから、ブレスレットが少々ゴツイ事になっているのか。

因みに。

これで少しレベルが上がリ、大分M2の扱いにも慣れてきた。俺達だけでなく、手持ちのM2のレベルも上昇してきた。そして、モンスターを倒した時に手に入るのは経験値とM2だけではない。ゲームお馴染みの「お金」も手に入る。

ゲーム開始直後は所持金が1000Gだったのだが、今では5000Gとなっている。

これなら、町に戻って道具や装備を整える事が出来るだろう。

「よし。そろそろ町へ戻ろう。嶺浩の事も気になるし」  
「はいっ」

俺と星野は、町へ向かって歩き出した。

Left：レベル7

メインメモリ：「刀使いLV5」、「回避LV3」、「ジャンプLV3」

サブメモリ：無し

Yui：レベル7

メインメモリ：「回避LV6」、「ジャンプLV2」

サブメモリ：「刀使いLV1」

町にたどり着くと、広場では、ざわめきが起こっていた。

「何だ？」

「一体、何が起こっているのでしょうか……」

このざわめきの正体は解らないが、とりあえず今の俺達の目的は嶺浩だ。

俺と星野は、ざわめく人々の間を通り、広場の「掲示板」へと向かった。

掲示板を確認してみると、俺達の残したメッセージにまだ何の反応も無い事から、まだ嶺浩がこの掲示板を見ていない事が解る。

一体、アイツは何処に行ったんだ？

とりあえず、今は嶺浩の事は置いておこう。

まず、このざわめきの原因を突き止めなくちゃならない。

俺と星野は、近くに居たプレイヤーに話しかけてみた。話しかけてみたプレイヤーは背中に槍を付けてはいるが、不安そうなおな表情をしているばかりだったのだが、他の、周囲の連中よりはまだ落ち着いていたので、この人にしたのだ（因みに男）。

「あの、すみません。俺達、さっきまで外に居たので、このさわぎの原因が解らないのですが、何か知りませんか？」

「あ、ああ。……じ、実は、ゲームからログアウト出来なくなっているんだ」

「えっ!？」

そんなバカな。

メモリブレスレットを見ても、ちゃんとログアウト画面は存在する。

「本当なんだって！ さっき、掲示板に急にクリエイション社から、ログアウト不能のメッセージが突然表示されて、それから皆大混乱さ」

「……!？」

俺と星野はあわてて、さっきの掲示板に駆け込んだ。  
そして、メッセージ機能を開く。

クリエイション社からのお知らせ

ログアウト不能

そこには確かに、「クリエイション社からのお知らせ」という題名と、「ログアウト不能」というそっけない文章が書き込まれて

いただけだった。

「そんな……ウソだろ」

メニューからログアウトを選んでタッチしても、ログアウトが行われない。

「どういう事なんだ？」

「まだテスト段階だからなのか？」

「そもそも、これは故障なのか？」

気がつけば、広場の時計はもう既に夜の10時を指し示していた。確か、テストを開始したのが午後12時だったから……もうこのゲームの中に入ってから10時間も経っているのか。

「あつ。鳴海くん。これっ！」

「っ。これは……」

掲示板に新たに表示されたのは、「クリエイション社からのお知らせ」だった。

気がつけば、俺達の周囲に他のプレイヤーが集まり、俺達の様子、というよりも掲示板の様子を見守っている。

俺は、掲示板のメッセージを開いた。

クリエイション社からのお知らせ

・この世界は、仮想空間だが、君達の体は仮想ではない。

- ・この世界での死は、現実での死となる。
- ・HPは、自分の命と同様だ。
- ・ログアウトをするには、ある条件を満たすしかない。
- ・プレイヤー同士の戦闘も可能だ。
- ・記憶を使い、クリアを目指せ。

どういう事だ……これは故障なんかじゃない。故意なのか？  
だとしたら、何故、こんな事をしたんだ？

この体は仮想じゃない。つまり生身。  
HPはプレイヤーの死と同様となる。

ログアウトをするにはある条件を満たさなければならない（ある条件ってなんだ？）。

しかも迷惑な事にプレイヤー同士の潰しあいも可能。

記憶を使い、クリアを目指せ……記憶とは、つまり「モンスターメモリ（M2）」？

ざわめく広場の中で、俺と星野はただ、呆然と立ち尽くしていた。

こうして、俺達の仮想空間での、実際の命を懸けたゲームが始まるうとしていた。

Left:レベル7

メインメモリ:「刀使いLV5」、「回避LV3」、「ジャンプLV3」

サブメモリ:無し

Yui:レベル7

メインメモリ:「回避LV6」、「ジャンプLV2」

サブメモリ:「刀使いLV1」

## 1 - 3 戦闘

ログアウト不能という驚愕の事実を知ってから、一日が経った。

……よし、大丈夫。

落ち着いている。

俺は、宿のベッドから起きて、とりあえず状況を把握する。

ログアウト不能。

現実世界には、ある一定の条件を満たさないと元に戻る事は出来ない。

ならば、なんとかしてこの世界、つまり、Memory worldの攻略を進めていくしかない。

それ以外、俺には、いや、俺達には、選択肢など、無いのだ。

ただ、この状況下で、時間が経った所為なのか、プレイヤーの大半は冷静になつてきた。

攻略を目標にする奴も居れば、仲間を集めて攻略を試みようとする者も居る。

俺は……とりあえず、今、自分に出来る事をしてみようと思った。まあ、えらそうに言ってみたものの、要はレベルアップだ。

今日は星野とは一緒に行動は、しない。

嶺浩を探す事もかねているので、とりあえず別行動で嶺浩を探しつつ、戦闘経験を積んでおこう、という事になった。

俺は、広場へと足を踏み入れる。

この広場には様々な商店も展開しているので、装備を整えるのは丁度良いだろう。

真つ先に俺が向かったのは、武器商人の所だ。

つまり、武器屋。

品揃えを見てみると、今の俺の所持金、4900Gがあればどの装備でも、例え一番高い装備でも購入する事は可能なのだが、他の道具等も買わなければならないので、とりあえずは値段だけを見に来たのだった。

どの武器も、初期装備の、今現在持っている武器の1、2、段階上ぐらいのレベルだ。

ただ、初期選択武装の「剣・太刀・双剣・槍・杖・銃・弓・ハンマー」以外の武器も、武器屋にはある。

例えば、「サイズ」がそうだ。

「サイズ」とは、一番解りやすいイメージだと、「死神の鎌」、だろうか。

まさにあんな感じの大鎌が店にはいくつかあった。

ただ、威力的には現在持っている「太刀」となら変わらない。強いて言うならば、リーチが違う、という所だろうか。

悩む……。しかし、防具も必要なのだが……。

結局、俺は武器の購入は見送る事にした。

武器屋では、武器の購入だけでなく、消耗した武器の手入れ等も

行ってくれるので、また来る事にはなるだろう。

## Now Loading

俺は、町の外に出る事にした。

とりあえず、これからこのゲームはどんな展開を見せるのか解らないので、戦闘経験を少しでも積んでおく事が大切だと思ったからだ。

今回は、昨日来たエリアよりも、少しだけ、奥の方へと足を踏み入れてみた。

ここらまで来ると、出現するモンスターのレベルも違ってくる。しかし、それは同時にさっきの場所よりも多少強力なM2も手に入るかもしれない、という事だ。

……どうやらさっそくおでましのようだ。

出現したモンスターは、オークだった。

手には斧を持っている。

掲示板で得た情報によると、このゲーム内ではゴブリンとオークの違いといえば、手に斧を持っているか、こんぼうを持っているかぐらいの違いらしい。

それにしても強そうだな。

倒したらどんなM2が手に入るんだろう。



俺が空中に跳躍したのと、オークが斧を振るったのが同時だった  
ので、危なかった。

空中で、今度は左手に「刀使い」を構成し、スラッシュ。  
これにより、太刀の威力が上昇する。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおッッッ!!」

俺らしくもない、大声を上げて、俺はオークの真上から太刀を一  
気に振り下ろす。

ズツシャアアアアアアアアアアアッ!! と、振り下ろした  
太刀がオークを真つ二つに切断した。

オークのHPも尽きたのか、そのままオークの体が光の粒子とな  
り、俺のメモリブレスレットに「コレクション」される。

入手M2

斧使いLv4

「メインメモリ」に保存しますか? Yes/No

ふむ。どうやら倒したモンスターのレベルによって入手した時の  
M2のレベルも変わる、という事か。

ここは「No」を選択。

「斧使いLv4」の保存先を選択してください。

「サブメモリ」

「バンクメモリ」Yes

今のところ、「斧」の武器はまだ持っていないので、「バンクメモリ」行きだな。

町に「斧」を持っている奴が居たら、別のM2と交換してもらおう。

それに、M2は町で売却する事も出来る。

俺と星野が昨日まで狩場として使っていた所で入手したM2でも一枚平均して150G〜200Gで売れたので、この「斧使い」ならば一枚500Gぐらいで売れたりするのかもしれない。

「バンクメモリ」には最大百枚ぐらいしか保存出来ないの、小まめに売却しないとすぐに一杯になってしまいそうだ。

とにかく、今日の所はここで戦闘経験を積んで、プレイヤーレベル、M2レベル、この両方のレベルアップを目標としよう。

……それにしても、さっきは本当にガラにも無く叫んでしまったな。

やっぱり心のどこかで俺は、「死の恐怖」にとらわれているのか

もしれない……。

## Now Loading

Left：レベル10

メインメモリ：「刀使いLv8」、「回避Lv6」、「ジャンプLv6」

サブメモリ：無し

疲れた……。

つーか今日はずっとオーク以外と戦ってないぞ……。

どうやらこの辺りはオーク以外のモンスターは出現しないようだ。もう少し奥の方へと進めば他のモンスターも出てくるだろうが、今日はもう止めておこう。

「バンクメモリ」もオークのM2で大半が埋まってきたし。

これまでに何度かパーティを組んでいると思われるプレイヤー達と会い、嶺浩についての情報を聞き込みしたのだが、皆、それらしい人物には思い当たらなかった。

それに、今日は自己ノルマのレベル10まで到達した事だし、よしよししよう。

それと、レベルが10に達した瞬間、「メインメモリ」の容量が一つ分増えた。

とは言っても、今の所は「刀使い」、「回避」、「ジャンプ」以外に使用するM2は無いが。

とりあえず、この道中に滝のような所があったので、そこに行つて顔でも洗つてこよう。掲示板に開示されていた情報によると、滝の辺りにはモンスターは出現しないらしいし。

幸い、町で購入した回復アイテムはまだまだ残っている。戦闘があったとしても、乗り切れるだろう。

そしてオークとの戦闘を経験して思ったのだが、モンスターと戦う際はある程度事前にM2を使用しておいた方が良いのかもしれない。

敵の攻撃に反応してからじゃ遅すぎるし（オークだからなんとかあったが）、M2にも一応効力が発揮する時間もある程度ある。

もっと素早い敵が現れば、それでおしまいだ。

滝に着いた。

一言で滝、と言っても、流れ自体は比較的穏やかで、見た所は安全だ。元々、プレイヤーの休憩ポイントとして存在しているのだから。

滝の溜まりはちょっとした池のようになっていて、水も見た所、綺麗だ。

「つ、疲れた……とにかく水を……」

ピタッ、とフラフラになりながらも歩を進めていた俺の足がそこで止まった。

理由は簡単だ。

目の前に、星野が居た。

それはいい。

いいのだが。

問題はその状況だ。

どうやら冷静に考えてみると、星野はこの滝で水浴びをしていたようで、側にはキッチンと折りたたまれた服が置いてあった。

そして、今の星野は勿論、その、なんというか、生まれたままの姿でそこに居たのだ。

つまりは全裸だった。

「……………鳴海、くん？」

硬直しながらも、星野は両腕で自分のその決して小さいとは言えない、それなりにふくらみのある胸を隠す。

「……………よ、よう」

「どうして、ここに……………？」

「ははは。決まってるじゃないか星野。疲れを癒す為だよ。実はさつきまでずっとオークと戦いつぱなしでな。そして喉が渴いたからちよっと水を飲もうかなって」

「そう、ですか……………」

「……」

「……」

俺はその後、容赦なく弓を次々と放つ星野から逃げるために、すぐさま滝から撤退した。

ていうか不可抗力だろ。これは。

……目の保養にはなっただけだな！！

Left：レベル10

メインメモリ：「刀使いLV8」、「回避LV6」、「ジャンプLV6」

サブメモリ：無し

Yui：レベル10

メインメモリ：「回避LV10」、「ジャンプLV8」  
サブメモリ：無し

1 - 3 戦闘(後書き)

M2名「アックス」 「斧使い」に修正

## 1-4 トレード

説明が今まであやふやだったが、このMemory worldのスタート地点、「中央広場」には、「掲示板」という物がある。

これは、皆が集めた情報等を更新する事によって、様々な人と情報を共有する事が出来るというワケだ。

ただし、情報にはある種の噂のような物もあり、そういった情報は「噂」カテゴリに更新するようになっており、そして確定情報は「確定」カテゴリに更新するようになっている。

これにより、情報の混乱を防ぐ為だろう。

因みにこの掲示板だが、町の至るところに設置されているだけでなく、メモリブレスレットに掲示板のユーザー情報として登録しておけば、掲示板にワザワザ行かなくても、メモリブレスレットから情報の更新が可能となっている。

全く、便利な所は相変わらず便利だ。

今日はとりあえず、そろそろ本格的に嶺浩を探そう、という事になった。何しろ、ゲーム開始直後に会おうと言っているのに、かれこれ数日は会っていない。

この調子だと、何処まで進んでいるのかも解らない。

情報収集がてら、そろそろ装備を整えようと思ひ、俺は星野と共に、再び、武器屋等がある市場へと向かった。

中央広場からすぐの所にあるので、こういう所も便利だ。

市場で、とりあえず軍資金を増やす為に昨日入手した「斧使い」のM2を半分残してから売却。合計で7500G増えた。  
うおっ。オークすげえ。

因みに、この売却もしくは、M2のトレードのやり取りはまず、M2を記憶<sup>データ</sup>ではなく、カード化させなければならない。

カード化させたM2を、例えばトレードし、入手した場合、カード化したM2を記憶<sup>データ</sup>へと変換し、自分のメモリブレスレットに「コレクション」すればOKだ。

売却した後は、残った「斧使い」M2をトレードする為に、トレード場へと向かった。

ここは、広場のような所で、この場所に来れば、来た人間が「M2のトレード待ち」という事が一目で解る。

俺と星野がトレード場に入って真っ先に向かったのは、「トレードボード」。ここには「M2のトレード希望」と言った風にトレードしたいM2を持っている相手に対して、宣伝を行う事が出来る。

因みにこの「トレードボード」もメモリブレスレットにユーザー情報として登録が可能となっており、随時、最新トレード情報の更新が行われ、これも何処にいても一目で解る。

さっそく、俺と星野はトレードボードをユーザー情報として登録。

これで、一目で最新トレード情報が可能となった。

さて、まずは「斧使い」M2のトレード希望者を探そう。

手持ちの「斧使い」は残り15枚。

トレードボードから、検索項目をM2にし、M2名「斧使い」で検索をかける。

「斧使い」に関するトレード情報について18件HITしました。

- ・「斧使い」「トレード希望！」
- 交換M2：「刀使いLv1」
- 詳しい条件を見る。

- ・生産職です。武器生産に必要な為、「斧使い」M2を複数枚トレード希望。
- 交換M2：「回避Lv1」、「刀使いLv1」
- 詳しい条件を見る。

- ・「弓使い」M2と「斧使い」M2トレード希望。
- 交換M2：「弓使いLv5」
- 詳しい条件を見る。

etc.etc.....

「あつ。私、「弓使い」のM2が欲しいです」

「確かに、それなりにLvも上がってるようだし、丁度良いな」

とりあえず、「詳しい条件を見る」を選択する。

条件を見てみると、それほど特に詳しい事は書いていなかった。

さっそく、俺はその人にコンタクトを取るべく、「詳しい情報を見る」に書いてあった連絡先に通話回線を開いた。

話を聞いてみると、その人はどうやら元「アーチャー」だったらしいのだが、新しく組む事になった同じパーティのメンバーに「アーチャー」が居た、という事で職業を「アックス」に変更するらしい。

なるほど。

道理で「弓使い」M2のLvが5もあるワケだ。

相手の都合も合うようで、俺達は「中央広場」を集合場所にして、すぐに集まった。

女性プレイヤーだったようで、星野も話しかけやすかったのか、元「アーチェリー」として、どんな動きをすればいいのかを聞いたりにしている。

元々星野はよくネットゲームとかは好きでやっていたらしいのだが、このような事態となるとやはり少しばかり勝手が違ってくる所為なのか、熱心に「アーチェリー」の立ち回りの話を聞いている。

「まあ、私もまだそこまで極めたワケじゃないから参考にならないかもしれないけど、頑張つてね」

それだけ言い残して、その女性プレイヤーは去って行った。

なんだかワザワザ「アーチェリー」から「アックス」にタイプチェンジしなければいけないので大変だな、と言ったら、元々色々な武器を使ってみるつもりだったらしく、問題は無いらしいのだが、それでも大変だな、と思いつつ、その背中を見送った。

そして、今現在の俺と星野の状態はというと、

Left：レベル10

メインメモリ：「刀使いLV8」、「回避LV6」、「ジャンプLV6」

サブメモリ：無し

Yui：レベル10

メインメモリ：「弓使いLV5」、「回避LV10」、「ジャンプLV8」

サブメモリ：無し

だ。

手持ちM2的にはまだまだだが、一応こちら周辺のモンスター程度ならば相手にならないくらいにはレベルアップした。

そして、残りの「斧使い」M2を、上手く他のM2と交換し、ある程度、色々な種類のM2が集まった。<sup>トレード</sup>

今度こそ武器屋に行こうと思ったが、その前に誰かのオススメ武

器情報の確認の為にメモリブレスレットから「掲示板」を開いた。

今日も色々な情報が更新されており、今朝確認した時よりも少し情報が更新されていた。

因みにこの掲示板だが、今最も注目されているレビュアー（更新するプレイヤーの事をそう呼んでいるらしい）が、「漆黒の銃撃手フラククトリガー」というプレイヤーらしい。

いや、実際のユーザーネームは「Trigger」という物なのだが、その「Trigger」というプレイヤーを実際に目撃したプレイヤーによると、黒い衣を身に纏い、そして黒き銃で戦うその姿から名づけられたいわゆる「通り名（らしい）」らしい。

通り名。

それはすなわち、強豪プレイヤーである何よりの証明だ。

そしてその「漆黒の銃撃手フラククトリガー」がなぜ、注目されているのかというと、なによりその攻略スピードの速さだ。

まだ数日しか経ってない中で、その「漆黒の銃撃手フラククトリガー」はもう第一のボスの所まで攻略したらしい。

まだ実際に戦ってはいないのだが、それまでの攻略上をUPしてくれたたり、色々な新発見情報を更新してくれたりと、実際にその貢献度は高い。

この「漆黒の銃撃手フラククトリガー」は小まめに序盤の範囲であれ、様々な情報を提供している、というワケで、注目度が最前線攻略組よりも高い。

貢献度、注目度が高いユーザー。

「ブラックトリガー漆黒の銃撃手」。

町にはその「ブラックトリガー漆黒の銃撃手」に憧れてか、黒い衣を身に纏っているプレイヤーも少なくは無い。

「コスプレイヤーかお前らは。」

「とにかく、さっさと嶺浩を探してやらないとな」

「そうですね。でも、情報が乏しいですし……」

「ったく。嶺浩も、このブラックトリガー漆黒の銃撃手さんに探してもらいたいな」

噂のブラックトリガー漆黒の銃撃手ならばすぐに見つけ出してくれそうだ。

「ほう。そりゃ手間が省けたな」

聞き覚えのある声がした。

「よう。久しぶりだな」

俺達の背後から、突如、捜し求めていた（？）、嶺浩が顔を出した。

「「うっひゃあああああ！？」」

俺と星野は同時にびっくりした声を上げた。

ていうか星野のびっくりした声がすげえ可愛いな。

「あつはつはつ。すまんすまん」

……あれだけ苦勞して探したのに、見つかる時は意外とすぐに見つかる物だな。

「全く。一体何処に行つてたんだよ」

「ああ。ちよつとな」

そして、嶺浩の格好を見てみると、なにやら黒いボロボロのマントを身に纏い、そして腰のホルスターには黒い拳銃を収めている。

……ていうか。これじゃあ、まるで……

「なんだよ。お前も『漆黒の銃撃手』のコスプレか？」

「は？ 『漆黒の銃撃手』？ ……ああ。それは俺だ」

嶺浩が、実は漆黒の銃撃手だったと。  
なるほどなるほど。

だから今まで見つからなかったのか。  
ボス戦手前まで攻略を進めていたのだから、そりゃあ見つかるわけ無いよな。

……は？

Left:レベル10

メインメモリ:「刀使いLv8」、「回避Lv6」、「ジャンプ

Lv6」

サブメモリ：無し

Yui：レベル10

メインメモリ：「弓使いLV5」、「回避LV10」、「ジャン  
プLV8」

サブメモリ：無し

Trigger：レベル16

メインメモリ：「銃使いLV15」、「回避LV12」、「ジャ  
ンプLV13」、「地形制御LV8」、「念力屈折LV4」

サブメモリ：「連射LV7」、「防御LV3」

とりあえず。

まあ、まずは理由を聞こう。理由を。

「で、自分から誘ってにおいて自分でドンドン勝手に進んで行ってしまった噂の漆黒の銃撃手さんの言い訳とやらを聞かせてもらってもいいぜ」

「おいばかやめろ。そんな目で見るな。さすがに心が折れる。俺の心はガラスなんだ。ガラスのハートなんだ。HG1/144スケールのガンプラ並みに脆いんだ」

「安心しろ。HG1/144スケールのガンプラは案外丈夫だ。そもそもHG1/144スケールのガンプラは俺のガンプラの原点なんだ。俺のガンプラの原点がそんなに脆いワケがない」

「解った！ 止める！ その構えている刀をしまえ！ ユーザー同士でもダメージ通るんだぞ！ デスゲーム状態なめんな！」

こっちはお前を探す為の時間はほとんど無駄になったんだぞこるあ（精一杯のヤクザ風の言葉づかい）。

とりあえず。

とりあえず、だ。

俺は刀をしまう。

なんだかんだ言っつて、この刀に代わる新しい武器もなんだかんだ買い損ねて続けている気がする。

「ふう。ならさっそく本題に入っつてやるか。仕方が無いな……解った！ 偉そうに言っつて悪かった！ だから刀を（ry」

因みに今俺達が居るのは、「中央広場」にある、星野と今後の対策を練る事によく利用したカフェのような所だ（ていうかカフェだ）。

このカフェでは、料金を払うと「体力回復」、「攻撃力小UP」、「防御力小UP」など、様々な効果を持ったドリンクを飲む事が出来る。

また、戦闘系だけではなく、「調合力UP」、「武装生産UP」、「アイテム加工UP」などの生産職系の効果を持ったドリンクもあり、生産職（このゲームでは生産職タイプになるには生産職専用の武装が必要だが）のプレイヤーの方が利用率は高い。

よって、こんなカフェの中でバリバリの戦闘用である刀を出したりしまったりしている俺はなんていうか、浮いている（因みに俺達が頼んだのは「体力回復」のドリンク。味は美味い）。

「うん……まあ、なんていうか、な。とりあえず、すまん」

ぺこり、と頭を下げて謝る嶺浩。

さすがにこれを見て、コイツを倒そうとは思わない。

「チツ。仕方がねえ。首だけは残しておいてやるよ」

「首以外は切るのかよ!？」

えっ？ 俺何かおかしな事言っただか？

「え、えっと、とりあえず、話を進めましょう」

星野が仲裁を入れてくれる。

「その……どうして、集合場所にこなかったのですか？」  
「うっ、その、それは、だな……」

あれ？　なんか俺の時と星野の時と反応がちがくね？

「なんていうか。俺の癖みたいな物なんだ」

「癖？」

「ああ。俺って、他のオンラインゲームでもそうなんだけど、序盤の準備だけはしっかりしておきたいタイプの奴なんだよ。だから、まずはとりあえず可能な範囲での情報を収集しておこうと思って……集合前に『軽く』下調べをしておこうかと」

お前の『軽く』の定義が知りたい。

「で、ユーザーネームが最初の物と違っていたのは？」

そうだ。

俺達はゲーム開始前に互いのユーザーネームを教えあっていたのだ。

確か、最初は「青い引き金」だった（正直ダサイと思った）。

「あ。ごめん。途中で思いなおして変えた。いや、ほら、だって冷静に考えてみればダサイじゃん？」

否定はしない。

まあ、これは許してやろう。

「……話を戻すが、まあ、この癖が原因でよく暴走しがちになっただけ。昔から、オンラインゲームでも暴走しっぱなしだった……すま

ん

良く言えば「用意周到」、と言えるのだろう。しかし、この場合、俺の目の前に居るこの漆黒の銃撃手は、用意周到すぎたのだ。

それゆえに、暴走してしまいがちだからこそ、多分、その他のオンラインゲームでも、今回のような事になってしまったのだろう。

顔も本当の名前も解らない物同士が一緒にプレイするのが、オンラインゲームだ。そんな中で一人、「行き過ぎた」独断行動をすれば、待ち受ける結果は恐らく　　一人ぼっちだ。

ここからは想像だが、だからこそ、電車の中で話しかけてきたのだろう。俺達に。

今度こそ、一人にならない為に。

事前に俺達がプレイヤーだと、解っているから。

だけど今回も暴走してしまった。

多分、気合が入りすぎていたのだ。

初めて誰かと一緒にプレイ出来るかもしれない、と。嬉しかったのだろう。

こんな、デスゲームみたいな状況なのに。

……本当に、バカだろ。

一人で全てやろうとしても、出来るワケねえじゃねえか。  
つーかなんか、怒る気力も無くなったよ。

「ああーもうっ！　解ったよ。解った解った！　この話は終わりだ！　とにかく、一緒にこれからの方針を練るぞ！」

「……っ。ああっ！」

そんな俺と嶺浩を見て、星野がにっこりと、微笑んでいた。

## Now Loading

今後の対策、としてはまあ、とりあえず、当面の目標についてはボスの撃破だ。

その為にはまず、武器の購入からする事にした。

一度外で（本当に一度だけだが）戦闘を嶺浩と共に行ってから、武器屋に向かう事にした。

ついに、あの武器屋で武器を買う時が来たか。胸熱だな。

「俺がオススメするのはコイツだな。太刀、『夜桜』」

嶺浩が武器屋の商品から取り出したのは、形は日本刀で、刀身がピンクに少し藍色がかかったような色の太刀だ。まさしく、「夜の桜」のような色をしている。

「？ どうしてそれなんだ？ 威力はまだ高いのがあるぞ」

一応、この『夜桜』も攻撃力はこの武器屋の中でも上から二番目なのだが。

「いや。それでいい。次は弓だな」  
「？」

納得は出来ないまでも、とりあえずは購入。

まあ、武器の事は解らないワケではないが、まあとりあえず、<sup>イ</sup>浩の指示に従っておこう。

何か考えがあるのかもしれない。

「弓は……これがいいだろう。『八重弓』。最大で八本同時に放つ事の出来る弓だ」

「は、はあ」

星野も要領を得ない、と言った感じだ。

しかし、さっきの一度の戦闘でコイツが何かを感じ取ったのならば、それに従ってみよう。

防具の方はというと、重みのあまりない、軽い防具（防御力はあまり無い）を購入しただけで、この後に、今度はまたカフェへ戻る。

「さて、武器も決めた事だし、まずはお前達の手持ちM2の確認と  
いっくか。見せてみてくれ」

「あ、ああ。解った」

Left：レベル10

メインメモリ：「刀使いLV8」、「回避LV6」、「ジャンプ

LV6」

サブメモリ：無し

バンクメモリ：「攻撃LV1」、「二度斬りLV1」、「火属性  
LV1」

Yu i : レベル 10

メインメモリ : 「弓使い L V 5」、「回避 L V 10」、「ジャンプ L V 8」

サブメモリ : 無し

バンクメモリ : 「攻撃 L V 1」、「連射 L V 1」、「火属性 L V 1」

因みにバンクメモリには、「斧使い」とトレードした M 2 が残っている。トレードして、その直後に嶺浩に出会ったので移動はまだしていなかったが。

「ふむ。なるほどな。上手くトレードを使ったな」

「解るのか？」

「ああ。お前達の進み具合からして、トレードをしなければ手に入らない M 2 があるからな」

なるほどな。

そういえば、嶺浩もまだ見た事が無い M 2 を持っている（さっきの戦闘では使わなかったが）。

「まず最初に一つ言っておくと、とりあえず『メイン』の枠は一つ開けておけ」

「どうしてだ？」

確かに、嶺浩も 1 枠開けている。

「この『メイン』と『サブ』は戦闘中に入れ替えを行う事が出来る。けどな、それは戦闘中に隙を生むだけなのは解るよな？ だけど、

どうしても入れ替えを行わなければならない状況というのも、出てくるのかもしれない。だから、そういう時の為にあえて1枠分だけ『メイン』を開けておき、いざとなったら『サブ』から『メイン』に『カードを入れるだけ』にするためだ。フルに全てM2を突っ込んで、戦闘中にモタモタ入れ替えをしているなんて事は出来れば避けたい」

つまりは、『メイン』と『サブ』のM2の入れ替え時間の短縮化だ。

まだ「斧使い」M2があつた時に試してみたのだが、『メイン』と『サブ』のM2を入れ替えを行う際にはまず、『サブ』から『メイン』に入りたいM2を選択。

その後、『メイン』と入れ替えるM2を選択し、交換するのだがこの時に「 と を入れ替えます。よろしいですか？」みたいな表示が出る。

その点、『サブ』から『メイン』の空きスペースに入れる時は、空き枠を選択するだけで、「よろしいですか？」みたいな表示は出ない。

『サブ』からM2を選択して、空き枠に入れるだけだ（「メイン」にあるM2と「サブ」のM2の、M2同士の入れ替えをした場合は別だが）。

なるほど、確かにこれは短縮化だ。

「まあ、一番良いのはM2を入れ替えしなくても良い事なんだけだな。翔太郎。お前の場合は特に、な」

星野と嶺浩とは違い、俺は前衛だ。

よって、M2入れ替えなんて時間は無いに等しいだろう。  
ただしそれは、一人の場合だ（それでも無い事に越した事は無い  
のだが）。

因みに、M2についての補足だが、同じM2を同時にメインメモ  
リに入れる事は出来ない。これについては、そういう風にプログラ  
ムされているようだ。

「これからはガンガン、M2を使っていけ。M2は戦闘で使用する  
毎に経験地が溜まり、レベルアップしていく。出来るだけ、可能な  
範囲で色々な種類のM2を使っていく事がコツだ。ただ、無理して  
使いすぎると戦闘中に隙が出来るからな。あくまでも、使える範  
囲で無理なく使え。それが、M2を使いこなす為の特訓にもなる」

とりあえず、「メイン」を少し調整。

とは言ってもまあ、M2を少し追加するだけなのだが。

Left:レベル10

メインメモリ:「刀使いLV8」、「回避LV6」、「ジャンプ  
LV6」、「二度斬りLV1」、「火属性LV1」

サブメモリ:「攻撃LV1」

Yui:レベル10

メインメモリ:「弓使いLV5」、「回避LV10」、「ジャン  
プLV8」、「火属性LV1」、「連射LV1」

サブメモリ:「攻撃LV1」

言われたとおりには、「メイン」の枠を1枠開けておく。

「属性付加」の効果を持つ「火属性」のM2は初めて使うタイプだが、上手く使いこなせるだろうか。

「攻撃」のM2だが、これは自分の装備している武器に関係無く攻撃力を上げてくれる物だが、これについては俺には既に「刀使い」が、星野には「弓使い」があるのでパス。

「よし。そんなもんだろ。んじゃ、今度は外でM2と新しい武器を使いこなせるようにレベルアップ兼特訓だ。ついでに、どうしてもその武器を選んだのかも教えてやる」

俺達はカフェを出て、最早お馴染みの特訓場かりばへと向かった。

Left:レベル10

メインメモリ:「刀使いLv8」、「回避Lv6」、「ジャンプLv6」、「二度斬りLv1」、「火属性Lv1」  
サブメモリ:「攻撃Lv1」

Yui:レベル10

メインメモリ:「弓使いLv5」、「回避Lv10」、「ジャンプLv8」、「火属性Lv1」、「連射Lv1」  
サブメモリ:「攻撃Lv1」

Trigger:レベル16

メインメモリ:「銃使いLv15」、「回避Lv12」、「ジャンプLv13」、「地形制御Lv8」、「念力屈折Lv4」  
サブメモリ:「連射Lv7」、「防御Lv3」



1 - 5 癍（後書き）

修正：二重切り 二度斬り

まず俺達は、狩場、もとい、町の外、つまり戦闘フィールドへとやってきた。

ここでの目的はレベルアップというよりも、新しい武器に慣れる為と、そしてM2を多用した戦闘の練習、と言った所だろうか。

「まず翔太郎。お前にその『夜桜』を購入させた理由はというと、その『夜桜』はかなり扱いやすい太刀なんだ。それは強化させて行っても同じらしい。夜桜系統の武器は扱いやすさがウリで、それなりに器用な武器だからな」

「へえー。知らなかった。どこでそんな情報を手に入れたんだ？」  
「掲示板の情報に書いてあったぞ。多分、生産職系のユーザーがつかんだんだろう。勿論、『確定』情報だ。ただし、あくまでも序盤で強化出来る範囲の事だけだな」

扱いやすさ。

確かに、この「M2を使った戦闘」において、扱いやすさは重要だろう。

下手に癖のある武器だと、慣れれば扱いやすくなるのかもしれないが、扱いづらい内は危険だ。

それは俺がまだこのゲームに対して慣れていない所為でもあるが、まだまだ動きが甘い俺には、確かにこの武器はピッタリなのかもしれない。

「そして星野。お前のその『八重弓』は最大、八発の矢を同時に放つ事が出来る。お前は翔太郎コイツと違って器用だからな。その弓もすぐに使いこなせるだろう。お前にはその弓で、俺達のサポートを行っ

てもらおう」

悪かったな。不器用で。

それにしても、こつやつて俺達の特性にあつた武器を選ぶ為にワザワザ一度武器屋に行く前に戦闘を行ったのか。

それにしても星野の「八重弓」は恐らく弾幕を張つたりする事も役目の内なのだろうが、俺が当てられないようにしなきゃな……。

ふと、気がついたが、自然な流れで俺達チームになつてるな。しかし、たった三人組これだけの人数で本当に足りるのだろうか。今後、ゲームを攻略していく上で。

「よし、じゃあそろそろ戦闘を行うためにモンスターでも探しに行くぞ」

そんな俺の不安をよそに、嶺浩はフィールドの奥へと進み始めた。

## Now Loading

町の外、つまりフィールドに出るには、東西南北4つのゲートがあり、そこを通過することで様々な方角のフィールドへと進む事が出来る。

俺と星野（嶺浩はもちろんの事）は既にその東西南北全てのゲートからモンスターと戦っていたりするのだが、あくまでもそれは町

周辺の話だ。

先日のオークのようなヤツが居る所まで、他の所はそこまで深く進んでは、居ない（唯一奥まで進んだのは東の方で、そこにオークが居た）。

因みに、今、俺達が奥へと進もうとしているのは西のゲートから出たフィールドだ。

既に、俺と星野が進んだ事の無いような所まで進んでいる。

ここに来るまで何度か新しい武器で戦闘を行ってみたが確かに、使いやすかった。

「おつ。来るぞ」

嶺浩が言ったのと同時に、モンスターが現れた。

それも、3体。

2匹はただの下級モンスターだが（なにやら小さな木に根のような足が生えていると言う姿のモンスター）、1匹は違う。

サイズが他の2匹よりも大きい。

姿は、4足の馬の足に、上半身は騎士のような甲冑を纏っている。ケンタウロスのような姿をしているが、明らかに上半身が違う上に、ちゃんと西洋の大剣のような物を持っている。

「チツ。『ナイトタウロス上騎士下馬』。中級モンスターか。強さはまだまだ序盤だから、中級の中でも下位、って所か……しかし、コイツはやっぱりだぞ。ってか、そもそも中級モンスター自体、このエリアではめずらしい」

口で説明をしながらも、手だけは動かし、嶺浩はさっそくM2を

選択して、スラッシュする。

スラッシュしたM2は、「銃使い」。

嶺浩は、ホルスターから黒い銃を取り出し、そして放つ。強化された銃から放たれた弾丸が、見事に下級モンスターの内の1匹にヒツトする。

しかし、体力はまだ削りきれれていないようだ。

「丁度良い。翔太郎。お前はあの『ナイトタウロス上騎士下馬』を倒せ。星野はもう1匹の下級モンスターだ」

「お、俺が!？」

「は、はいっ」

「俺が手助けしてやってもいいが、それじゃあお前の経験値が溜まらない。それに、やばくなったら星野にも助けてもらえばいいし、本当にやばくなったら俺も手助けする」

「う、わ、解った」

俺と星野がそれぞれ違った返事をする。

とりあえず俺は覚悟を決め、M2を選択する。

選択したのは「刀使い」、そして、「ジャンプ」だ。

そして2枚を随時スラッシュ。

俺の太刀を使った攻撃力と、そしてジャンプ力が上昇する。

「っ! ばっ……!」

嶺浩が何かを言いかけたが、かまわず突進。

あの2匹の下級モンスターは上騎士下馬ナイトタウロスを守るように、俺達を目

の前に立ちはだかっている。

だったら、それを飛び越えて攻撃してやりやあ、いい。

ゆえに、「ジャンプ」を使ったのだが、「刀使い」+「ジャンプ」は俺のお気に入りコンボという理由もあるので、とりあえずはコレで最初は攻める。

ダンツツツツツッ！！と、俺は「ジャンプ」によって強化された足で高く跳躍する。

2匹のモンスターを飛び越え、ナイトタウロス上騎士下馬に向かって一気に、飛ぶ。

そのまま、『夜桜』を振り下ろす。

「おおおおおおおおおッ！！」

振り下ろした刀は、ズツバアアアアアアアアアアアアッ！

！と、ナイトタウロス上騎士下馬を切り裂く。

やはり中級モンスター！

一撃では倒せない。それどころか、まだまだ体力を残している。

「バカ野郎ッ！ 次が来るぞ！」

嶺浩が言った直後だった。

その次が、来た。

ナイトタウロス上騎士下馬はその手に持っていた大剣をそのまま、着地した俺に向かって振り下ろしてくる。

「ッー！」

そうだ。

今までのモンスターはまだまだレベルが低く、こつやつて「刀使い」で強化した状態で斬れば体力の大半を奪うか、もしくは撃破だったので、敵に「よろけ」が発生して次の攻撃に備えられた。

だけど、目の前のモンスターは違う。

今までのモンスターと、違うのだ。

「よろけ」は相手の体力がかなり低下しないと発生しない。

つまり目の前の上騎士ナイトタウロス下馬体力はまだまだ残っていて、「よろけ」など、発生しない。

そのまま、攻撃行動に移ってくるのだ。

「回避」のM2を使う暇は、無い。

大剣が、当たる　　ッ！

「チッ！」

そんな嶺浩の声が聞こえた直後。

ぐんつ、と、大剣の軌道が少しだけ、反れる。

「ッ!?!」

俺はその間に左にステップを取り、回避を試みるが、大剣が俺の肩をかすめた。

痛い。

体力も削られる。

しかし、血は出ない。

「間に合ったか……!!」

どうやら嶺浩に助けられたようだ。

使ったM2は恐らく「念力屈折」。

使えば一時的に念力を得て、敵の攻撃を屈折させる事が出来るらしい。

ただしこのM2は扱いが難しいらしく、まだレベルも嶺浩の持つM2の中では低いらしいのだが。

「気をつける！ お前が今まで戦ってたモンスターとは少し違うぞ！」

「ああ！ 悪い！」

その間に出来るだけ、ナイトタウロス上騎士下馬との距離をとる。

とりあえず、大剣の届く距離レンジからは離れる事に成功した。

俺の体力は1/3程削られている。

そんな俺に、今度は下級モンスターが襲い掛かってきた。それも、背後から。

「！」

これにはなんとか反応できた。刀を振るい、その剣のような鋭利な触手から、身を守る。

ガキイツ、と剣と剣をぶつけたような音が響いた。

「そのモンスターはツルキキ剣木だ。火属性に弱い」

「星野！」

「はいっ！」

俺がツルキキ剣木を引き付けている間に、星野は「火属性」のM2をスラッシュ。これにより、星野の持つ「八重弓」に火属性が付加された。

「行きます……！」

ギリギリギリ……、と、弓を引つ張り、そして、矢を放つ。火属性が付加された、矢を。

その先端は松明のように赤く燃え上がっており、同時に放たれた5本の矢は、見事に剣木ツルギキに直撃した。

元々、俺とのやりとりでダメージを負っていたので、剣木はそのままHPを失い、消滅。

星野の元に記憶メモリとなつて、「コレクション」される（「自動コレクション先設定」で「バンク」にそのまま自動でコレクションされるようにしている）。

まずは、1匹……！

「そろそろ倒すぞ」

今度は嶺浩の番だった。

嶺浩はM2「地形制御」を選択し、スラッシュ。

そしてその直後。

地盤が、揺れた。地震かと思つたが、それは違う。

これこそが、「地形制御」の能力。フィールドの一定の範囲の地形を意のままに操る。

残った剣木ツルギキの足元が崩れ、地面が盛り上がってゆき、剣木ツルギキを取り囲み、そして最後には地面が剣木ツルギキをガツチリと拘束する。

そして嶺浩は再び「銃使い」をスラッシュ（恐らく、最初にスラッシュした「銃使い」の効力が切れたのだろう）。

しかしその瞬間、動きを見せなかった上騎士下馬ナイトタウロスが動き出した。

馬の足を生かし、力強く嶺浩に突進してくる。

俺は「刀使い」と「二度斬り」と「回避」を選択し、すぐさまスラッシュ。

ナイトタワーロス  
上騎士下馬が振るう大剣に向かって、カウンターで「二度斬り」をお見舞いする。

因みにこの「二度斬り」は、簡単に言えば刀を連続で振るう事が出来るM2だ。

しかし、通常の動作と違うのは、「二度目の刀を振るうスピードが格段に速くなる事」。

ガツギイイイイインツ！ と、「夜桜」と大剣が激突し、そして弾かれる。やはり、向こうの方が威力は高い

刀が弾かれ、腕が後ろにのけぞる。

しかしその直後。

まるで加速装置でも付けたかのように。

まるでビデオの早送りかのように。

俺の腕はすぐさま二太刀目を、斬った。

ナイトタワーロス  
上騎士下馬の大剣に、再び激突する。

しかしこれでもまだ、受け止めきれない。あの馬の足の脚力が、強い。

よって。

俺は、「回避」した。

『相手の大剣と激突させているまま、相手の大剣ごと、回避する』

そのまま上騎士下馬は、俺の動きに導かれて、嶺浩へと向かっていたハズの大剣を振り上げた突進は、軌道を逸らされた。

ここまでの戦闘に約、3秒。

「上出来だ」

「そりやどうも」

ゴバツ！！！！！！！！と、そのまま嶺浩は拘束した剣木に、火属性の弾丸、トドメの一撃を放つ。

「残るはコイツだけだな。仕方が無い。HPが0になって死なれても困る。お前等二人でやった方がいいな」

「星野、手を貸してくれ」

「あ、は、はいっ」

そして、再び上騎士下馬がこちらに向かって突進してくる。自分を守るモンスターが居なくなったので、積極的に攻撃するようになってきたな。

俺達は同時に「回避」をスラッシュ。

上騎士下馬の突進をかわし、三方に散る。

「星野！ 弾幕を張ってくれ！」

「解りました！」

ここに来るまでに行った戦闘で、星野は「狙いを付けて撃つ場合、8本同時は難しい」というような事を言っていたのだが、この場合は狙いをつけなくていい。

ただ、弾幕を張れば良いのだ。  
そして星野は「連射」をスラッシュする。

ガガガガガガガガガガガガガガガガガガッ！と、「火属性」の効力がまだ消えてない弓で、8本同時・2連射を行う。  
合計16本の矢が上騎士下馬を襲い、直撃する。体力も徐々に削られてきた。

今だー！！

俺は「刀使い」、「ジャンプ」、「回避」、「二度斬り」をスラッシュ。

まずは「ジャンプ」の力で跳躍し、「刀使い」で強化された太刀で、着地と同時に、斬る。

それでもまだ、倒せない。

反撃が即座に来るが、これはあらかじめスラッシュしておいた「回避」でなんとかかわす。そして、かわした瞬間を、「二度斬り」で、再び、斬るッ！！

ドッ！！と、「夜桜」が、ナイトタウロス上騎士下馬の体を、切り裂いた。そのまま、ナイトタウロス上騎士下馬の体が細かい粒子となってゆく。

「倒したか」

嶺浩がそう呟くと同時に、ナイトタウロス上騎士下馬のM2、「突進」が、俺のメモリブレスレットに「コレクション」された（共闘したとしても、最後にトドメを刺したユーザーにM2は「コレクション」される）。

「倒、した……」

俺は地面にストン、と座り込んだ。  
こんな所でこんな調子じゃあ、この先が思いやられる……。

入手M2

Left：突進LV6

Yui：曲斬りLV1まがりぎ

Trigger：曲斬りLV1まがりぎ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7000y/>

---

Memory world

2011年11月23日15時44分発行